この6月末で定年退職になる。35年間、会社という組織の中で、その組織によりかかって生活をしてきたことになる。組織の中にいる間は、その組織の目的や価値観、ルールによって束縛される反面、そのルールに従って暮らしていけば、生活は安定し、自分も家族も守られる。そのことに慣れ、たいした疑問を抱くこともなくなっていた。

ところが、60歳になって、会社から卒業することになった。その日が来ることは、会社に入ったときから、ずっと分っていた。分ってはいたが、そのとき自分がどうするかを決めていたかというと、そうではなかった。あらためて手遅れ型の自分に驚いた。

悩んでいるだけでは話にならない。どうするかを真剣に考えなければならない。何もすることなく毎日が過ぎていくことには、自分自身が耐えられない。グルグルと思考が空まわりした。

そういうとき、ふと浮ぶ言葉というのがある。今回は、"仕事は人類が考え出した最高の遊びである"という言葉だ。誰の言葉かは忘れてしまったが、自他ともに認める仕事人間だった私は、その言葉を読んだ瞬間、確かにそうだなあと、妙に感心した記憶がある。

"就職と就社を区別すべし"ともよく言われる。在職中に、自分の会社が他の会社に吸収合併された経験をした私は、あらためて就職の大切さを思う。この2つの言葉が、鍵だった。

次の仕事をしよう。どこか良い会社はないかと探すのではなく、手に職をつけて、身をたてよう。そう頭を整理すると、自ずとやろうかなと思うことは見えてくる。

過去に何度もお世話になった"整体"の校

術を身につけることができるのであれば、少しは自分のまわりの人たちの役に立つだろう。定年がない仕事であれば、機能するのをやめることもないだろう。仕事をして、働いている間は、ボケることも少ないだろう。考えてみれば、自分にぴったりではないか。

それが本日、ここにいて、この試験を受けている理由である。残りの人生で、何年働くことができるかは不明である。しかし、将来のために、3年間修業するくらいの余裕はあるはずだ。ありがたいことに、妻もそうだと賛成してくれた。あげることなく、やりとげたいと思っている。